

平成30年6月18日現在

機関番号：34604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11690

研究課題名(和文) 出生前検査を希望する妊婦と夫への意識調査

研究課題名(英文) Awareness survey of pregnant couples wanting to undergo prenatal diagnosis

研究代表者

美甘 祥子 (Mikamo, shoko)

奈良学園大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：10613804

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：出生前診断を受けるか否かの意思決定の際に、妊婦と夫の知識や意識がどのように影響を及ぼしているかを明らかにした。調査の結果、出生前診断を受けるか否かについて話し合いを持ったのは6割で、検査の詳細や検査後の対応について話し合ったのは半数以下であった。話し合いが「不十分であった」との回答は2割であった。話し合いの際に不足していた知識は、検査の種類や方法、母体や胎児への影響と回答した割合が高かった。これらから、出生前診断を受けるか否かについて話し合う妊娠初期に、妊婦にも夫にも知識提供が必要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Survey findings showed that 63% of the pregnant couples who responded to the survey had discussed with each other on whether to undergo prenatal diagnosis. Among these couples, those who discussed what to do after the tests accounted for only a small percentage. In addition, 25% of the respondents answered that “the discussions were insufficient.” A high percentage of respondents stated that the knowledge lacking during the discussions consisted of the types of tests, the methods used therein, and the impact on the mother and fetus. Therefore, health professionals must provide pregnant women in the early stages of their pregnancy (as well as their husbands) with the necessary knowledge to discuss whether to undergo prenatal diagnosis. In addition, healthcare providers must offer opportunities for discussion and make adjustments to ensure adequate discussions.

研究分野：助産学

キーワード：出生前診断 妊婦 夫 知識

## 1. 研究開始当初の背景

妊婦と夫の出生前診断を受ける際の最終的な希望が一致しない場合は、妊婦の希望が優先されることもある。しかし、こうした状態での実施は望ましくなく、十分に話し合う機会を設けて、統一された妊婦と夫の理解と同意が得られることが望ましい。このため、妊婦と夫は、出生前診断を受けるか否かに関して十分な知識を持ち、お互いの意見を尊重しつつ話し合う必要がある。

遺伝に関する専門資格を有する医療者の数は少なく、規模の大きい施設に偏在している。そのため、全ての妊婦と夫が遺伝に関する専門資格を有する医療者にケアを受けることは困難である。今後、出生前診断を希望する妊婦がさらに増加すると予測されることから、一般の医療機関で普段より妊婦のケアを行っている助産師・看護師が中心となり、遺伝の専門家と連携し、出生前診断を希望する妊婦と夫をサポートするシステム作りが必要である。

出生前診断を受けるか否かの意思決定において、夫婦の意見が尊重されることが重要であるが、夫に直接行った調査は少なく、研究の余地がある。出生前診断に関する意思決定をする際には、日本独自の文化や倫理的背景が大きく影響することから、妊婦と夫をカップルで調査し、その知識や意識、必要とするサポートを明らかにすることで、遺伝カウンセリングにつながるための助産師・看護師が行う援助の示唆を得ることは有益であると考えられる。

## 2. 研究の目的

妊婦と夫の出生前診断に関しての知識や意識と、希望するサポートについて明らかにし、看護ケアへの示唆を得る。

## 3. 研究の方法

1) 出生前診断を希望した夫婦の出産にいたるまでの体験の研究

出生前診断を受検しその結果に問題がなく、妊娠分娩産褥期が正常に経過し、新生児の経過に問題のない褥婦と夫を対象とした。褥婦と夫の出生前診断に関しての知識や意識、希望するサポートを明らかにするために半構造化面接と質問紙調査を行った。調査期間は2016年5月から7月であった。面接内容は、出生前診断に関しての知識や意識、希望するサポートであった。

対象者から了解を得た上でICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。インタビュー内容から逐語録を作成し、妊婦と夫の体験を表している部分を抽出し質的記述的方法で分析した。逐語録の意味内容を損なわないように文脈をコード化し、コードの類似性を比較検討してサブカテゴリーを統合し、サブカテゴリーの比較検討、再編を繰り返しながらカテゴリーを抽出した。

倫理的配慮は、研究者が所属していた教育

機関の倫理審査委員会の承認を得た。妊婦と夫に対して、研究趣旨、調査方法、参加の自由意思、参加拒否が不利益とならないこと、個人情報保護、学会での成果公表について書面および口頭で説明した上で、研究参加の同意を得た。

2) 出生前診断に対する妊婦とその夫への意識調査

施設の産婦人科医が「母体と胎児の経過に問題がなく本調査に耐えうる」と判断した、妊娠22週以降の妊婦と夫を対象に、出生前診断を受けるか否かを選択する際に、夫が妊婦に及ぼす因子と必要な援助を明らかにするために質問紙調査を行った。調査期間は2016年9月から2017年6月であった。調査内容は、「出生前診断を希望した夫婦の出産にいたるまでの体験の研究」の結果をもとに作成した出生前診断に関する知識や意識、希望するサポート、胎児感情、夫婦関係であった。

分析は、記述統計量を算出し、群間比較には $\chi^2$ 検定、Fisher直接確率法、Harbermanの残渣分析、 $t$ 検定、Mann-Whitney U検定、Bonferroni法を用いた。統計ソフトSPSS Statistics ver.25を使用し、有意水準を5%とした。

倫理的配慮は、研究者が所属していた教育機関の倫理審査委員会の承認を得た。妊婦と夫に対して、研究趣旨、調査方法、参加の自由意思、参加拒否が不利益とならないこと、個人情報保護、学会での成果公表について書面および口頭で説明し、質問紙の提出をもって研究協力への同意を得た。

## 4. 研究成果

1) 研究協力者の概要

質問紙を460組に配布し、回収数は夫195名(回収率42.4%)、妊婦239名(回収率52.0%)であった。有効回答数は192組(384名)(有効回答率41.7%)であった。

研究協力者の回答時の年齢の平均は、夫34.4±5.4歳、妊婦32.3±4.4歳であった。また、妊娠週数の平均は28.8±3.1週であった。妊婦の出産経験は、初産婦127名(66.1%)、経産婦65名(33.9%)であった。

2) 出生前診断に関する認知度

妊婦と夫(192組)の出生前診断を「良く知っている」との回答は夫31名(16.1%)で、妊婦は62名(32.3%)と比較し有意に低かった。また、「知らない」との回答は夫14名(7.3%)であったが、妊婦は0名(0%)であった。

出生前診断の検査法で「良く知っている」と回答した割合は、夫は羊水検査、母体血清マーカー検査、NIPT、胎児ドック、NT測定順に高かった。妊婦は羊水検査、胎児ドック、NT測定、母体血清マーカー検査、NIPT順に高かった。羊水検査、胎児ドック、NT

測定, NIPT では「良く知っている」と回答した割合は, 妊婦と比較し, 夫は有意に低かった。母体血清マーカー検査では「聞いたことがある」と回答した割合は, 妊婦と比較し, 夫は有意に低かった。

### 3) 出生前診断に関する知識

妊婦と夫(192組)の出生前診断に関する知識(11項目)で「知っている」と回答した数の平均は, 夫は $2.4 \pm 2.9$ で, 妊婦の $4.7 \pm 3.3$ と比較し有意に低かった。

### 4) 出生前診断の情報源

出生前診断について「良く知っている」「聞いたことがある」と回答した夫と妊婦で, 出生前診断の情報源の項目が無回答であった者を除く, 夫174名, 妊婦188名の出生前診断について情報を得たもの・人について分析した。

出生前診断について情報を得たもの・人では, 夫はテレビ77名(44.3%), パートナー57名(32.8%), インターネット51名(29.3%)の順に割合が高かった。妊婦はテレビ104名(55.3%), インターネット97名(51.6%), 病院のパンフレット24名(12.8%)の順に割合が高かった。

テレビ, インターネット, 病院のパンフレット, 大学での講義から情報を得た割合は, 夫は妊婦と比較し有意に低かった。パートナーから情報を得た割合は, 夫は妊婦と比較し有意に高かった。

また, 医療関係者から出生前診断の情報を得た割合は, 最も多い医師でも夫16名9.2%, 妊婦22名11.7%であった。

### 5) 出生前診断を受けるか否かについて話し合った内容

出生前診断を受けるか否かについての話し合いに関する回答のあった178組を分析した。そのうち, 出生前診断を受けた経験があったのは60組(侵襲的検査4組, NIPT6組, NIPT以外の非侵襲的検査のみ50組)であった。出生前診断を受けるか否かについて「話し合いをした」は223名(62.6%)であった。話し合いが「不十分であった」は89名(25.0%)であった。

回答のあった198名の話し合いの回数の平均は $2.5 \pm 1.9$ 回であった。回答のあった192名の話し合いの延べ時間の平均は $35.3 \pm 36.7$ 分であった。

出生前診断について話し合った内容に記載のあった223名の結果を分析した。出生前診断について話し合った内容で最も多かったのは「検査を受けるか否か」195名(87.4%)で, 続いて「検査でわかること」98名(43.9%), 「望まない結果の時の対応」92名(41.3%), 「費用」71名(31.8%), 「検査の種類」66名(29.6%)の順であった。「障がいをもつ子どもがいる生活」は, 62名(27.8%)であった。

4群間の比較(妊婦・出生前診断の受検経験あり45名, 夫・経験あり46名, 妊婦・経験なし58名, 夫・経験なし74名)では, 「検査の種類」「検査の母体への影響」「検査の胎児への影響」「実施時期」では夫・経験ありが有意に高く, 「検査の実施施設」では妊婦・経験ありと夫・経験ありが有意に高かった。

### 6) 出生前診断の受検経験のある妊婦と夫が出生前診断を受けるか否かについて話し合った内容

出生前診断を受けた経験があったのは60組(侵襲的検査4組, NIPT6組, NIPT以外の非侵襲的検査のみ50組)であった。出生前診断を受けるか否かについて「話し合いをした」と回答した割合は, 侵襲的検査とNIPTは10割であったが, NIPT以外の非侵襲的検査のみは7割であった。

出生前診断を受けるか否かの話し合いをした回数に回答のあった81名の平均は $2.7 \pm 1.7$ 回であった。話し合いの延べ時間に回答のあった77名の平均は $39.7 \pm 34.8$ 分であった。

出生前診断について話し合った内容に回答のあった妊婦(45名)と夫(46名)では, 「検査を受けるか否か」80名(87.9%)が最も多く, 続いて, 「検査でわかること」47名(51.6%), 「望まない結果の時の対応」43名(47.3%), 「検査の種類」40名(44.0%), 「費用」35名(38.5%)の順であった。一方で, 「障がいをもつ子どもがいる生活」は29名(31.9%)であった。また, 「実施時期」を話し合ったと回答した妊婦は8名(17.8%)であり, 夫の18名(39.8%)と比較し有意に低かった。

### 7) 出生前診断を受けるか否かの話し合いに不足している知識

出生前診断を受けるか否かの話し合いに不足している知識に回答のあった179組で出生前診断を受けた経験があったのは61組であった。出生前診断を受けるか否かの話し合いのための知識が「不十分」との回答は, 出生前診断の受検経験ない夫は88名(74.6%), 妊婦は76名(64.4%)であり, 受検経験のある夫は31名(50.8%), 妊婦は22名(36.1%)であった。

出生前診断を受けるか否かの話し合いのために不足していると思う知識に回答のあった179組358名の結果を分析した。知識が不足しているとの回答で最も多かったのは「検査の種類」231名(66.4%), 続いて「胎児への影響」213名(59.5%), 「母体への影響」193名(53.9%), 「実施方法」192名(53.6%), 「費用」187名(52.2%)の順であった。

出生前診断の受検経験のある夫は「胎児への影響」「母体への影響」「検査の種類」「実施方法」「望まない結果の時の対応」の順であった。出生前診断の受検経験のある妊婦は「検査の種類」が最も多く, 「実施方法」「障

がいをもつ子どものいる生活」「母体への影響」「費用」の順であった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

美甘祥子, 中塚幹也 (2018) 妊婦と夫への出生前診断の認知度に関する実態調査, 医療福祉情報行動科学研究, 5, 27-34.

美甘祥子 (2016) 生後4か月までの児を持つ父親の育児・家事行動と育児ストレスに関する文献レビュー, インターナショナル nursing care research, 15(3), 143-151.

[学会発表](計2件)

美甘祥子, 妊婦と夫への出生前診断に関しての認知度と知識の実態調査, 第32回日本助産学会, 2018年3月3~4日, 横浜.

S.Mikamo, A.Ida, Qualitative analysis of material posted to social media on prenatal diagnosis by mid-life expectant mothers, 20th EAFONS, 2017.3.9-10, Hong kong.

[図書](計0件)

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等  
なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

美甘 祥子 (MIKAMO Shoko)  
奈良学園大学 保健医療学部 看護学科  
研究者番号: 10613804

(2)研究分担者

中塚 幹也 (NAKATUKA Mikiya)  
岡山大学 保健学研究科  
研究者番号: 40273990

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし